

医学部入試はこう動く 大手予備校の最新分析 私立大学編

入試日程の重複で併願校数が減少 複数の選抜方式を利用して幅広く出願を



国公立大学と違い、入試日程さえ合えば何校でも挑戦できるのが私立大学です。ところが、私立大学では入試日の2月移行が進んでいることから、入試日が複数校で重なる例が増えており、今後は従来の半数程度しか受けられなくなる可能性があります。だからといって合格が遠のくわけではありません。推薦・総合型選抜や共通テスト利用選抜も視野に入れて受験機会を増やすなど、従来とは異なる受験戦略で臨んでチャンスを広げましょう。

富士学院 学院長 村田 慎一 氏

受験機会の減少と募集定員の削減 来年度以降は難化が必至

私立大学の医学部志願者は増加傾向にあります。2026年度の一般選抜の志願者数は11万221人。昨年度より4375人増え、志願倍率は37.5倍から39.4倍に上がりました。倍率だけを見るとため息が出そうな高倍率です。しかし、志願者数は延べ人数です。近年は一人当たりの受験校数が増加傾向にあるので当然、志願者数も倍率の数字も上がってきます。私立大学で医学部入試を行う大学は全国に31大学あり、2026年度の総合合格者数は7135人です。仮に志願者が1人5～6校受験したとすれば、実数は2万人程度。2万人が受験して延べ7000人が合格したと考えれば、それほど高い倍率ではありません。

注意を払わなくてはいけないのは、入試日程です。2026年度入試では、2月1日に川崎医科大学、日本大学、久留米大学、東京女子医科大学の4校の入試が重なりました。その影響で川崎医科大学が大きく志願者数を減らしました。2027年度入試では2月1日はさらに1校増えて、5校が重複します。また、2月2日は杏林大学、北里大学、東海大学など5校が、4日は金沢医科

大学、埼玉医科大学など6校が重なります。ここまで入試日が重なった例は今までありません。私立大学の一般選抜は2月1日以降に実施するという取り決めがあり、文部科学省ではここ数年、その遵守徹底を強化しています。このため1月に入試を実施していた大学が2月に移行する例が多く、日程の重複が増えているのはその影響です。これまでは多くて10校程度は受けられましたが、今後はその約半分程度に減る可能性があります。

これに追い打ちをかけるのが医学部募集定員の減少です。医師不足対策のために設けられた地域枠の設置で近年、医学部の定員は増加し、地域の医師偏在が改善されてきました。このため文部科学省では、各地域の実情に応じて医学部定員を調整していく方針で、2027年度以降は定員削減の方向性にあります。医学部は各大学の募集定員が限られているので、少数であっても定員が減少すれば競争は激化します。

推薦型も共通テスト利用も 利用できるもの全てを利用する構えで

受験機会の減少、募集定員枠の縮小など、難化する要因が目立つ現状ですが、だからといって合格可能性が減ったわけではありません。状況

が変わったのであれば、違う受験戦略に切り替えればよいのです。視野を広げ、「受けられるものは何でも受ける」という戦略で臨めば、チャンスは広がります。

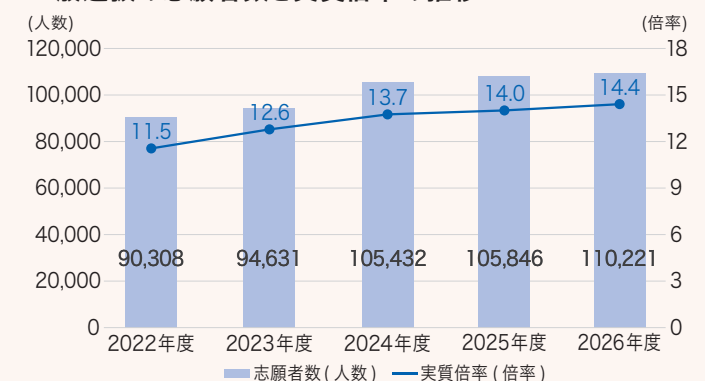
大学入試には一般選抜のほか、学校推薦型・総合型選抜があり、その募集枠は拡大を続けています。他学部比べて比率は低ですが、医学部でも約3割は学校推薦型・総合型選抜で入学しています。出願資格は「現役生のみ」「1浪まで」などと大学によって違いますが、条件さえ合えば一般選抜とは異なり、ライバルが限定された中で勝負することができます。

共通テスト利用選抜の活用もお勧めです。共通テストという試験科目数が多いので、私立専願の志望者はあまり考えていないかもしれませんが、しかし、選抜に必要な科目が「英語・数学・理科」のみ、あるいはこれに「現代文」が加わるだけといった大学も見られます。これなら私立受験型の勉強しかしていない受験生でも、特別な準備をする必要はなく、直前に共通テスト用の演習をすれば対応できるでしょう。

早めに綿密な受験計画を立て 不安に飲み込まれない強さを

今までは第1志望、第2志望、押さえ校とレベル別に受験できたのに、それができなくなる――。受験機会が減ることは、受験生にとって大きな精神的負担になります。しかし、それも準備の

私立大学医学部 一般選抜の志願者数と実質倍率の推移



仕方次第です。まずは推薦型選抜から始まり、共通テスト、2次試験、後期試験までを含めて、受けられるものはどれかを考えましょう。日程が重複している大学についても細かく調べます。1次試験が重複しなくても、2次の面接試験が他大学の試験と重なる場合もあります。どちらを優先すべきか、難しい判断を迫られる場合もあります。受験が始まってから後期試験のことを考えていたのではとても乗り切れません。

たださえ私立大学の選抜方法は大学ごとに多種多様で複雑です。全てを把握した上で自分に合った大学を選ぶのは難しいことです。その意味では医学部専門の予備校など、専門家のアドバイスを聞くことはとても有効です。医学部受験は長期戦です。学力はもちろんですが、粘り強さも問われます。大事なこの時期、不安に飲み込まれない強さを持つためにも、早めに自分に合った受験計画を立て、悔いのない受験校選びをしていただきたいと思います。

医学部合格者の共通点とは

医学部入試では全大学が面接を課されています。そこには「頭が良いだけでは人の命は救えない」という大学側の思いが感じられます。学科試験の点数ばかりに目がいきがちですが、「人間的な成長」も合格には不可欠です。人との関わりが希薄になったせいか、社会への関心が薄い子どもたちが増えた印象を受けます。面接や小論文で時事

問題が重視されるのもそのためでしょう。「社会で起きていることに関心を持つと同時に、人との関わりを大切にする姿勢を持つ」。医師は患者と接する職業です。その本質的な部分を忘れないでください。





高い合格率の鍵は「教える」教育 学力と人間力を鍛え「未来の良医」を育てる

医学部受験に特化し全国に10校舎を展開する富士学院。学力と人間性を育む少人数制の指導で、毎年、2人に1人以上を医学部医学科に送り出しています。独自の教育手法について村田慎一学院長に伺いました。

医学部合格には学力に加えて 人間的な成長が不可欠

医学部専門予備校として、医学部医学科に圧倒的な合格力を誇る富士学院。2026年度は医学部医学科専願者696名のうち、実数で412名が合格。合格率は59.2%に達しました。例年2人に1人以上が合格をつかんでいる背景には、同学院が創立当初から大切にしている「教える」教育があります。

「育む」というキーワードについて、村田先生は「今の教育は教えるだけで止まっています。大量の知識をインプットして学力を向上させることはもちろん大事ですが、心の部分が成長しなければ真の学力にはつながりません。富士学院では勉強を教えるだけでなく、医師を志す心を育てています」と説明します。生徒一人ひとりに「なぜ医師になりたいのか」という本質的な問い掛けを徹底し、自覚と自立を促しながら成長へ導く。それが「教える」教育なのです。



医学部受験
富士学院
学院長
村田 慎一 先生

全国に10校舎を直営で展開する富士学院には、高卒生を対象とした国公立医学部コース、私立医学部コース、国公立・私立併願コースの3コースに加え、現役生も受講できる個人指導があります。国公立医学部コースだけは選抜試験を実施していますが、それ以外のコースは合格を目指して真面目にがんばるという生徒を全て受け入れています。現在の成績を問わずに入学を許可して医学部合格へ導いている点が大きな特徴といえます。「医師という職業に就きたい人たちをお預かりする以上、学力は当然として、受験を通じて人間性も育てていきたい。それが出発点です」と村田先生。「成績を伸ばすには、生徒自身の人間的な成長が欠かせません。ただ教えるだけでは限界があり、伸ばしていくための根っこの部分こそが大事なのです」と強調します。

教職員がチームでサポート 「本気」のスイッチを押し続ける

こうした学院の理念を支えるのが、熱意あふれる教職員の奮闘です。日々の授業は学力別で8名以内の少人数制。講師は生徒の状況を確認しながら双方向型の授業を進め、1週間に一度の「週テスト」で理解度を確認します。各種テストの結果に応じて、それぞれの生徒に合わせたフォローアップを行うのはもちろん、クラスの理解度によってはもう一度同じ単元の授業を行うこともあります。医学部受験に精通したプロ講師に授業中はもちろん、授業時間以外でも質問ができる環境が整っています。

昨今の医学部入試でより重視されるようになった面接指導にも力を入れています。医学部受験は「医師という職業を前提とした就職試験」ともいえるもので、大学側は受験生の本気度を見極めようとしています。面接で不合格となる受験生も少ないため、1年がかりで面接指導に取り組んでいます。こうした対策も富士学院の強みといえます。

さらに、独自のチーム制で生徒一人ひとりをサポートします。生徒ごとに担任講師と教務担当が付き、全ての科目の講師と校舎長と共にチームを作って生徒の現状や課題を共有し、科目間の指導のバランスや課題の調整を行っています。チームとしての連携指導では常に具体的な目標を掲げ、その実践を後押しし、最終的には本人との相性を含めた出願先の提案までを行います。「どの生徒にも必ず“本気になる瞬間”、つまりスイッチが入る瞬間があります。富士学院では、形式的なチーム制ではなく、講師も職員も一丸となってそのスイッチを押し続ける存在です。そのためには相当な熱量と使命感が求められます。これまで誰も押せなかったスイッチを押すことができるのが、富士学院の強みです」

また、医学部合格を目指すサポートの一環として、全国各地の高校で校内医学部入試セミナーや大学での過去問解説、入学前準備教育など高校・大学からの依頼を受け活発に連携を行っています。校内セミナーは年間約100校、延べ500校以上で開催しています。

生活面・健康面のサポートも万全 卒後も根強くつながる富士OB会ネットワーク

ほかにも生活面のサポート体制として、男子寮・女子寮を全校舎に完備し、寮生だけでなく通学生も利用可能な学院専用食堂を設置。栄養面・衛生面に配慮した温かくおいしい食事を土日祝日を含めて毎日3食提供しています。このように食生活を大切に考える姿勢は、健康面や生活面での取り組みとしても重要です。そこから

も、『教える』という学院の理念が垣間見えます。また、医師・医大生で構成される「富士OB会」の存在も特徴的です。2026年4月時点で2,090名が登録しており、700名以上が医師として全国で活躍しています。現在は、順天堂大学特任教授の天野篤先生を顧問に迎え、医大生向けの講演会の開催や全校舎で「自立講座」を実施。医師としての覚悟、責任、そして学びの姿勢について講演を行っていただいています。

最後に、村田先生は医学部を目指す受験生にメッセージを送ってくれました。「多くの職業の中から医師を目指すことに敬意を表します。医師は直接命に関わる職業だからこそ、医学部受験には一定の学力が必要です。ただ単に合格を目指すのではなく、皆さんが医師として成長していくその先で待っている患者さんをイメージしてください。医学部入試は、学力だけではなく、人間力も問われます。部活動やボランティアなど、さまざまな社会経験を通して、人間力と学力の両輪を成してください。人の命と向き合って、止まりかけた人生を直接的に未来につなげられる職業は医師しかありません。そんな医師を目指して共にがんばりましょう。」

各科目の講師陣と担任講師、 担当職員と校舎長がチームとなって合格に導く



富士学院の大きな特徴の一つが「チーム制」です。受験は総合点で合格が決まるため、総合点で合格最低点を上回るために何が重要かという視点に立ち、生徒一人ひとりの現状や課題をチーム全員で共有し、苦手科目の克服や得意科目の強化など、状況に応じて指導バランスや課題量を調整します。本人とも方針を共有しながら、出願先も学力と相性の両面からチームで検討。一人ひとりに合わせた戦略的な指導が、高い合格実績につながっています。

